

幌尻岳の概要（自然環境やアイヌ伝説について）

1 現況

幌尻岳は日高支庁平取町と新冠町との境界にある山で、日高山脈の最高峰となる。標高は2052mである。

日高山脈は、幌尻岳の他、戸鶯別岳、イドンナップ岳、エサオマントツタベツ岳と、2000m近くの山々がひしめいている。数千万年前の太古の地球において、ユーラシアプレートと北米プレートが海底で衝突し、東西の両側から押されて海が浅くなり、一方のプレートが地上高く持ち上げられて成長したものと考えられている。西側ほど地殻の深い部分を見せており、幌尻岳については、持ち上げられた海洋地殻に由来するカンラン岩やチャートとった岩石が見られるとともに、持ち上げた大陸性地殻の変成岩も認められる。幌尻岳の標高は、2052メートルですが今も成長し続ける山である。



新冠町レ・コード館展望塔から望む日高山脈（左が幌尻岳、右がイドンナップ岳）

幌尻岳周辺には、カールと呼ばれる圏谷（けんこく）がある。これは氷河時代に氷河によって削り取られた地形をさし、氷期は新旧に大別され、古い方の氷期は25～15万年前といわれ、この時期はポロシ氷期と呼ばれている。カールは、「七つ沼カール」、「北カール」、「東カール」の3つがあり、特に七つ沼カールは日高山脈最大のカールで、文字通り雪解けや雨が降るとカールが七つの沼のようになることからこのように呼ばれている。ここは、幌尻岳の絶景ポイントとして登山客の目を楽しませているとともに、アイヌ民族の伝承が残る地として知られている。



七つ沼カール

日高山脈は、原始の自然が残る地としても日本で最たる場所として捉えられている。植物においては多くの固有種が自生し、隔離分布する植物が見られることから貴重な場所となっている。日高山脈の固有種として、ヒダカミネヤナギやカムイビランジ、北海道固有種としてはウスユキトウヒレンやホソバイワベンケイなどがある。また、動物においては天然記念物であるクマガラやオオワシが飛来する他、太古の時代から生きている「生きた化石」といわれるナキウサギが生息している。

2 名勝ピリカノカについて

◎名勝ピリカノカとは何か（目的）

- ・北海道には、アイヌ民族の歴史、物語、伝承といった文化的背景と結びついた自然環境が多々あります。中でも、名所や学術的に価値の高いものを、国指定の文化財「**アイヌ文化に関連する名勝：ピリカノカ(アイヌ語で美しい形)**」として指定し、保存・保護してアイヌ文化と北海道の大自然について理解を図ることを目的としています。

◎北海道の名勝ピリカノカ指定の経過

- ・平成 18 年度、文化庁の要請により、北海道教育委員会は、市町村教委、アイヌ協会、アイヌ民俗研究センター、アイヌ研究推進機構の協力を得ながら、アイヌ文化に係る史跡候補地をリストアップしました。この時点で 172 箇所の候補地が集まり、その後、文化庁主任調査官がアイヌ協会との打合せを行い、**21 箇所に候補地を絞込みました。**

この 21 箇所の候補地のうち、幌尻岳が含まれました。

現地調査、資料収集、土地所有者の確認など、準備が整ったところから指定のための申請を行い、文化財保護審議会で答申後、文化庁の官報告示にて正式に名勝ピリカノカの指定となります。

平成 21 年度から 24 年度までの指定地は以下のとおりとなります。

九度山（クトゥンヌプリ）	名寄市
黄金山（ピンネタイオルシペ）	石狩市
神威岬（カムイエトゥ）	枝幸町、浜頓別町
襟裳岬（オンネエンルム）	えりも町
瞰望岩（インカルシ）	遠軽町
カムイチャシ	豊浦町
絵鞆半島外海岸	室蘭市
十勝幌尻岳（ポロシリ）	帯広市、中札内村

◎幌尻岳が名勝ピリカノカに選定された理由

- ・日高山脈の主峰幌尻岳は、標高 2052mある山脈の最高峰となります。この山には、氷河時代に形成された圏谷（けんこく、またの名をカール）があります。このカールは、雨が降ると沼のようになり、この沼が7つあることから、地域の人達は古くから「七つ沼カール」と親しみをこめて呼んでいます。**数々の動植物が生息し、北海道の大自然を物語る豊かな自然を誇っています。そのため、「日本百名山」にも選ばれており、平取町側と新冠町、日高町、帯広市側の四方から登山を楽しむことができます。**

アイヌの人達の間では、**幌尻岳を舞台にした様々な伝説**があります。古来から神様がいる山として崇拜し、祈りを捧げていたといひます。アイヌ語で、「ポロ・シリ（大きな・山）」と呼ばれ、日高路での霊山とされている。

以上のことから、**豊かな自然を有し、アイヌ文化や伝説が息づくところとして、名勝ピリカノカに選定されました。（平成 25 年 10 月 17 日）**

◎新冠町における名勝指定の経過

○平成 24 年度：指定に向けての申請業務を行う。

- ①幌尻岳に関する資料集め
- ②幌尻岳は国有林なので、森林管理署と協議、同意書を得る（平成 25 年 2 月 12 日付）
- ③同時に幌尻岳は国定公園なので、日高振興局から同意書を得る（平成 24 年 11 月 27 日付）
- ④文化庁へ意見具申のためのヒアリングにのぞむ（平成 25 年 1 月 23 日）
- ⑤文化庁へ提出する意見具申書の作成し提出する（平成 25 年 1 月 29 日付）

○平成 25 年度以降：指定に向けての連絡調整を行う

- ①引き続きホロシリ打鍵移管する資料を集める
- ②他の指定地に赴いて活動の現状を調査する。
- ③幌尻岳歩道の取扱いについて、森林管理署と協議を重ねる
- ④文化財審議会は、文部科学大臣に名勝ピリカノカの追加指定に関する答申を行う（平成 25 年 6 月 21 日付）
- ⑤**文化庁は官報告示で幌尻岳を名勝ピリカノカを追加指定する。（平成 25 年 10 月 17 日付）**
（北海道で 9 箇所目、日高管内で 2 箇所目）

3 アイヌ文化との関連

アイヌの人達の間では古来から神様がいる山として崇拜され、祈りを捧げていたという。アイヌ語では、「ポロ・シリ（大きな・山）」と呼ばれ、日高路での霊山とされている。狩猟において捕獲された熊を、この山に返すイヨマンテの儀式が付近のアイヌ集落で行われていた。日高のアイヌ民族にとっては、古くから神聖な場所として捉えられている神秘的な場所である。

ポロシリには「山頂に海水湖がある」との伝承がある。沼の中には幅の広い昆布が生えており、秋になると何百、何千という海の鳥やアザラシ・トドが渡ってきて、この沼で冬を越し、春にな

るとまた海へ戻っていくといわれている。

さらに「幌尻岳（ポロシリ）には白熊が棲んでいる」との伝承がある。その姿を見たとき突風に吹き、見た者は遙か彼方まで吹き飛ばされてしまう。しかし絶対に怪我をすることはない。人間の血で山が穢れるのを神がいやがるからである。この白熊の家来になりたがる者がいるが、よほど品行方正な者でなくてはならない。しかし運良く家来になると、子孫は白熊の加護で幸運に見舞われる。鶴川の奥でも、二、三の老人が白熊の家来にしてもらった、とのことである。

このことから、幌尻岳は、アイヌの人々の間では古来から神様が住んでいる山として崇拝され、祈りを捧げていたといい、日高路での霊山とされている。

また、狩猟において捕獲された熊をこの山に返すイヨマンテの儀式が付近のアイヌ集落で行われており、日高のアイヌ民族にとっては、古くから神聖な場所として捉えられている神秘的な場所である。

北海道教育委員会では、かつて地元のアイヌ民族の子孫を対象にアイヌ民族文化財の記録を行った経緯がある。そこには幌尻岳にまつわる伝説がいくつか記されている。

この辺で一番大きな山は、ポロシリ porosir で、家にあるヌサ nusa で必ずカムイノミした。父親は、そのポロシリに測量に行き、重い石を背負って頂上までのぼったそうだ。

[西島 てる氏]

北海道教育庁生涯学習部文化課編 1988 『昭和62年度 アイヌ民俗文化財調査報告書（アイヌ民俗調査Ⅶ）』 p.68

ポロシリ porosir の山の上には海だが沼だかあるそうだ。ウウェペケレ uwepeker ではそう言われている [貫気別 上田トシ氏]

北海道教育庁生涯学習部文化課編 1996 『平成7年度 アイヌ民俗文化財調査報告書（アイヌ民俗調査ⅩⅤ）』 p.42

カムイミンタラ kamuy mintar（神の庭）はポロシリ porosir（幌尻岳）のところにあって言う。カムイミンタラのカムイ kamuy（神様）」はクマのことではなくて、目に見えない神様が住んでいるのだと思う。カムイ エワク シリ kamuy ewak sir（神様が住んでいる場所）がカムイミンタラだ。 [貫気別 上田 トシ氏]

北海道教育庁生涯学習部文化課編 1998 『平成9年度 アイヌ民俗文化財調査報告書（アイヌ民俗調査ⅩⅦ）』 p.36

ポロシリ porosir は、沙流川のエトコホ etokoho（川上）にある山ではないか。ウウェペケレ uwepeker にも、サツ トウラシ sat turasi（沙流川にそって上流へ）、シシリムカエトコ sisirimka etoko（沙流川の源流）、サレトコホ saretokoho（沙流川の源流）と言われている。 [貫気別 上田 トシ氏]

北海道教育庁生涯学習部文化課編 1996 『平成7年度 アイヌ民俗文化財調査報告書（アイヌ民俗調査ⅩⅤ）』 p.56

ヌプリ nupuri

額平川の奥にポロシリ porosir という山がある。これは大きな山だ（ポロ ヌプリ poro nupuri）。山の高いところをカントコトロ エウシ カネ アン kanto kotoro eus kane an（天

にくっついている) という。

カムイノミするのはオチルシ、エサンピラ、ポロシリである。エサンピラは貫気別と額平川の縁のアブシにある。どんな神様がいたのか知らない。 [荷負本村 西島 てる氏]

北海道教育庁生涯学習部文化課編 1988 『昭和62年度 アイヌ民俗文化財調査報告書(アイヌ民俗調査VII)』 p.44

山奥の沼

小さい時に親から聞いたが、三角点を建てるためにポロ シュプリに登ろうとしたが、カムイマウ kamuy maw (嵐) にあおられて誰も上がれない。ようやく上がって見るとあまり大きくない沼(トー to)があちこちにあった。何か黒い魚が泳いでいるのが見えたので、それが神様だと思ってカムイノミしたということだ。黒い魚は二匹いたので夫婦の神様ではないかと親が言っていた。わしの弟が行ってから5、6年たってから行った人があるが、カムイノミもしないで行ったのが悪かったのか転んで肋骨を折り、連れの二人は怪我をした。この山に登れない人は心がけ(ケウトゥム kewtum) が良くない人だ。沼の中に昆布が生えているというのは聞いたことがない。 [荷負本村 西島 てる氏]

北海道教育庁生涯学習部文化課編 1988 『昭和62年度 アイヌ民俗文化財調査報告書(アイヌ民俗調査VII)』 p.44

ポロシリ岳に登った男の物語

(上田氏による日本語粗筋)

ニナチミアninacimipという、富川の近くのアイヌがシシリムカsisirmuka(沙流川)のエトコetoko(源流)のポロシリporosirのカムイkamuy(神)のヌプリnupuri(山)の話を若い人たちが言っているのを聞いても自分は行こうとも思っていなかったが、何となく途中から行ってみたいとたまらなくなった。行けるか行けないかわからないが、これだけ行きたいのならば死のうと生きようとかわまないから行ってみたいと思った。行く仕度をして食料もたくさん背負って、二晩泊まっても三晩泊まっても不自由ないように、出かける前にも自分の家の神様にも言って、こういうわけでポロシリの山のとっぺんに登って見て来たいので出かけるから、自分の家の神様も自分を守ってくれれば自分はポロシリに行って見て、立派な話をおみやげに持ってくるからということを書いて家から出た。行くと何か自分を引っ張って行くような気がして、自分の足で歩いているような感じがしないで飛んででも行っているような感じで行ってポロシリの山の下についた。だいぶ日も傾いているので荷物を降ろして水の神様にも背負って来たものを供えて、山の神様、ポロシリの山のとっぺんにいる神様にも、自分はニナチミアから来たアイヌで、ポロシリのとっぺんにあがりたくて来ているんだから、自分を迎えに来て無事に上がって見るように守ってくれないか、と拝んだ。それから上がっていったが、二足三足足をおこせばすべり落ちて、それからまた這って上がっては、木につかまり登って行った。少し登ってはすべり落ち、また膝で這う、四つん這いになるという具合にして登るうち、先を見ると、大きな木が立っているのが見えた。あの木のところまで行かなければどうにもならないからと思ってがんばって登って行った。どうにか大きな木のところまでとどいて、休むのにいいように後ろがへっこんでいるのでそこに荷物を降ろして、また食べ物を出して先に木の神様に供えて、ここで一晩泊めてください、自分はニナチミアのアイヌでなんとしてもポロシリのとっぺんにどんな神様が住んでいるか、目で見えなくても見るだけでも見てから死にたいと思って来たのだから、神様、かわいそうして(同情して)守って手伝って、自分を押ししてくれればいい、と拜んで拝んだ。少し登ると上からもものすごい音がすると思って見ると風と雨ともものす

ごく今にも飛ばされるようにおもって、恐ろしくて、なんでこんなところに来たのかなと思って、神様に拝んで、自分がここで落ちて死んだら、死んだ臭いで神様も一緒に住むことができないうくらいゆるくない（つらい）から、神様自分をかわいそうして（同情して）、むかえに来て、無事に山の上に登らせて神様の住んでいるところを見せてくださいと拝んで拝んだ。そのうち、風や雨が通り過ぎたかと思うと、登っていくとまた風と雨が吹いて来るので、大きな木に抱きついて飛ばされないようにして、やっとポロシリの上にたどりついた。こんな立派なところに上がったと思ってうれしく思って休んであたりを見ると、海か沼かわからないが、海の魚はうようよいる、海の鳥も飛んでいる。たまげて、こんな山の上にどういふわけでも水もないところにこんな大きな沼があって、海の魚、海の鳥がいて、長いコンブが青々している（シウニン *siwnin*）のだろうか。一日や二日ではまわりきれないくらい大きな沼だったが、あまり長くいると家族が心配すると思って、一晩だけ、神様に拝んで沼のはたに泊まった。どんな神様かわからないが、こんな立派なところを見せてもらったので、自分が死んだらここで神様と一緒に住まわせてもらうから、ということを書いて、神様もたくさんいるのだろうと思って、食べ物もあちらこちらにまいたり拝んだりして泊まった。次の日になってから帰ろうとしたが、何か持って帰らなければ本気にされないと思ったので、ああいう山のとっぺんにこういうコンブというものがあつたということ家族や部落に見せようと思ってコンブを二三本取つた。コンブの神様にも泥棒したのではない、持って帰つて家族ばかりでなく、神様みんなに見せたいから取つたので、泥棒したのではないから悪く思わないでくれ、と拝んで荷物をこしらえた。長いものだから折り畳んで背負い縄に入れて縛つて降りてきたが、途中まで降りてきたら何か背中がもよもよする気がするので荷物をおろせないでそのままきたが、あんまり背中で動く感じがするので、丈夫な木のあるところで、ここなら足場が大丈夫だということで荷物を降ろしてみると、コンブだと思つて背負つたのに、大きな蛇であつた。たまげて、悪く思つて取つたのではない、コンブだと思つて取つたので、申し訳ない悪かつたと謝りながらひもをほどくと、長いもので、両側に抜けていくのにいつ抜けていくかわからないくらい長い時間をかけて抜けて行つた。そのあと蛇にも帰つてから謝るから、と手をあわせて拝んでから、空荷物で降りてきた。残つた食べ物も神様に供えて家に帰つた。家に帰ると皆喜んで、心配して寝るに寝れないでいたがよかつた喜んでくれた。自分は疲れているから明日にならないと話ができないから、今晩は食べるだけ食べさせてくれ、といつてすぐ寝て夢も見ないで寝た。次の日になると部落の人が集まつてきたので、こういうわけで途中に大きな木の所に一晩泊まつて山のとっぺんに上がったなら、たまげることには海の鳥、海の魚がいた。鳥は飛べるが魚はどつから来たのかと思つてたまげていた。コンブものびていたの背負つて降りたが、蛇になつてしまつたので、たまげて帰つて来た。おそかれはやかれ死んだらポロシリに行くということ神様に伝えて来たから、死んだらポロシルンニナチミナ *porosir un ninacimip* のアイヌ、といつて、自分に供え物してくれればポロシリの方から自分の親の方にも送るから、ということを書いた。まだ元気で山仕事、海の仕事をやつていたが、若いのに具合が悪くなつた。もう自分は死ぬが、ポロシリに行くに違いないから、ポロシリの神様にもイナウ、酒をあげてくれと頼んで死んだもんだということニナチミナのアイヌが物語つた（この話は故川上マツ子氏録音テープで聞いた）。

北海道教育庁生涯学習部文化課編 1996

『平成7年度 アイヌ民俗文化財調査報告書（アイヌ民俗調査XV）』 pp.74-75

このように、地元のアイヌの方々からも幌尻岳に関する伝説を多く聞くことができ、地元

の昔話として脈々と受け継がれてきたことがわかる。

さらに更科源蔵の記録には、幌尻岳の「沼」と「熊」にまるわる話が記されている。

ポロシリ岳の熊

千歳町に日高貫気別の奥にあるポロシリ岳に酒をあげる人々がいる。その人の祖先はポロシリ岳にいたヌプリコルカムイ（山の神）という熊であったが、その熊の足がだんだん人間の足に変わってきて、やがて人間の女と恋愛をして子供が生まれたのであるという。

（千歳町 今泉柴吉氏伝）

更科源蔵 1955 『北海道伝説集・アイヌ編』

幌尻岳の白熊

日高の幌尻岳には昔白熊がたくさんいたというが、白熊のことを白い神様とって獲るものは昔からなかった。

この幌尻岳の頂には大きな沼があって、沼の中には幅の広い昆布が生えており、秋になると何百何千という海の鳥が、きれいな声で鳴きながら渡ってきて、この沼で冬を越し、春になるとまた海へ戻っていく。アザラシやトドも冬にはここへ越冬に来て、春になると雪解けの水ののって海に下るということである。この沼にはいつも大きな波がたっていて波の音が遠くまで聞こえるというが、その音のきこえるあたりまで行くと白熊の姿を見ることができけれど、その姿を見たと思ったとたん大風が吹き、人間が木の葉のようにはるか麓まで吹き飛ばされてしまう。しかしどんなに遠くまで吹き飛ばされても絶対に怪我はしないようである。それは人間が怪我をすると血で山がけがれるからだという。この白い神様の家来にしてほしいと頼む老人があるが、よほど精神の立派な人でないとそばに置いてもらえない。もし神様のそばに置いてもらうと高い山の上から見守ってもらえるから、その子孫や親戚は運の良いことが続く。鵠川の奥でも二・三人白熊の家来になった老人があるということだ。

（^{むかわらう}鵠川町チン部落 片山カシンデアシ老伝）

更科源蔵 1955 『北海道伝説集・アイヌ編』

幌尻岳の大沼

昔日高アツベツの老人が幌尻岳に登ったところ大きな沼があり、その岸に白熊の遊んでいる姿が見られた。するとこつぜん老人の前に怪しい者が現れて、「おまえはどこから来た。もし帰ってからこんなところがあるなどと口外したら、命をとるからそう思え」とにらんだので老人はびっくりして、決して口外はいたしませんと誓って、ほうほうの態で逃げ帰ったが、元来おしゃべりなこの老人、誰かにこのことを話したくてたまらず、とうとう家の者にひそかにその話をしてしまった。その後まもなく、老人は外出したまま帰らなかった。

幌尻岳には古くから不思議な沼があって、そこには海のもものが皆住んでいると伝えられていたが、この老人の話によって一層不思議がられるようになった。

（吉田巖氏輯「人類学雑誌」二九卷一〇号所載）

更科源蔵 1955 『北海道伝説集・アイヌ編』

ここに記される沼とは、幌尻岳のカール地形をさすものと思われ、七つ沼カールや北・東カールにはこのように興味深い伝説が隠されている。

その他、帯広の土人学校の教師を務め、アイヌ研究者として活躍した吉田巖の幌尻岳にまつわる記録が残されている。

ポロシリは昔から不思議なおそろしい山であるといつてある。いくら上った者でも、もどってきた者はない。よしもどつて来ても山の実態をつきとめて頂上まで登った者はないという話である。山腹からモヤが深くて年中登れない。大沼が山上にあるという話であるからいつとなく風説となっていたが、見知ったという人はなかった。大昔、アッペツのオヤヂ1人この山に登ったら大沼があつて岸には白熊も見えた。1人のおそろしい者があらわれていうのには、おまえはどこから来た、もし帰つてこんな所があるといつたら殺してしまうぞといつた。オヤヂは許して下さい。決していわぬといつて家に帰りまた来ることを約して家にもどり、一らくを話してオヤヂも家に口どめしたがやはり言伝えが残った。この湖には海の物はなんでもおり、湖の主はサキシマエツ（蛇）というものなそうだ。

(明治44・8・8、ニプタニ、貝沢イヨの父)

吉田巖 1957 「日高國沙流アイヌ古老談話記録」

『愛郷譚叢 <アイヌ古事・風土記資料>』 帯広市社会教育叢書 No.3 p.48

熊と亀とは、よめ、むこのやりとりをしたという話はきかないが、亀は山から下るものなそうだ。このシシリムカでも、アイヌが山から下る亀をたしかに見たといつてある。この川上に大湖沼があつて、そこにいるのが下るのであろうといつてある。ポロ・シリのトウ（沼）の説などもこんなところから想像された説らしい。

(明治44・8・8、ニプタニ、貝沢イヨの父)

吉田巖 1957 「日高國沙流アイヌ古老談話記録」

『愛郷譚叢 <アイヌ古事・風土記資料>』 帯広市社会教育叢書 No.3 p.49

サキシマエツ

ポロ・シリ沼におるといふ。またチロロ附近の山にも、昔から住んでおるといふ。姿はたしかに見えないが大した匂いのきつい化ものだという。私の兄貴、サンコレアシ、夏チロロにマタギにいって、このサキシマエツの匂いにさわって、全身腫れて自由を失い、つかえつたが、どうにも同居させられないから、別に家をたてて、ここにいさせ、神にたのんで、ようやくとなおつた。

(大正2・1・7、ポロサル、長野パレシナ)

吉田巖 1957 「日高國沙流アイヌ古老談話記録」

『愛郷譚叢 <アイヌ古事・風土記資料>』 帯広市社会教育叢書 No.3 p.59

金田一京助の記録に、アイヌ民族にとって神様の一人として捉えられる「オキクルミ」が、幌尻岳を舞台に人間社会の基礎をつくり上げるという興味深い伝説があるので紹介する。

ポロシリ

これは人間の祖であるオキクルミが、天上の風をこの土へ移して人間風習のいっさいの基を開いたと説明する神話の一説である。オキクルミある時、沙流川の上流へ遡って十勝と日高の国境に屹つポロシリ山上の神境へ出た。そこには神々の来て遊ぶ神園がある（アイヌの信仰ではここに霊湖があつていっさいの海鳥・海草並びに鹹水魚も住む—いかなる人もここを究めることが出来ず、陸地測量部の人もまだ湖水のある所までは行ったものがないと）。魔神たちの方の神園は隅々が暗くこもり、光明神たちの方の神園は目も遥かに開けて美しい。日暮になる

と、魔神たちがその神園へ集まって遊び始めたが、その物言う声はブキブキブキブキして何を言うんだかわからない。歌いのしる声はガヤガヤガヤガヤしてちっとも面白くない。その内に夜中になるとみな四散してどこかへ行ってしまい、それから光明神たちが集まって来た。天上に住む神もみな集まった。やがて神々の遊びが始まったが、神々の歌舞の声は洋々と長く、さまざまな手振りとともに軽やかに身を翻してひらひらと舞い踊るのが面白い。見て居る内に夜が明けはなされた。その時、どこからともなく美しい音色が空の下に響いて来るので、振り返って見ると、美しい若い女神が黄金の神駕に乗って天降った。神駕には神紐が附いて徐ろに天から降りて来た。神駕の中の若い女神は数多の神々の遊びを目も放たず眺めていた。その美しい容貌を見ると、オキクルミは心も空になって、妻に持つならこういう少女をと考えた。やがて神々も長い間遊び戯れて、今はみな四方へ帰って行った。一等最後に件の若い美しい女神も天上へ去ってしまう。オキクルミは、『よもやこのままに逃がしてしまおうや』とあとを附けたけれども見失って空しく帰り、家へ戻って臥床へ身を投げて物も食わず病みついてしまう。ある日また急に思い立って最前の所へ出かけた。日が暮れると、前のように鬼どもがまた集まって遊ぶ。歌う声、囃す声はやっぱりブキブキガヤガヤした。夜中になってそれが帰ってしまうと、神たちが天上からも地上からも集まって、歌う声戯れる声が面白くはじまった。しかし件の美しい少女はどこにいるか見えない。その内にまた美しい音が空中に響いて遥かに神紐が降りて来る。その端に神駕が附いて、神駕の上に一人の女神が乗ってやはり神々の遊びをじっと眺めている。けれどもこの前の少女ほどは美しくない。その内にまたどこからかいま一人の女神がやって来て、神駕の女神の傍へ並んで、二人で四方山話をしはじめた。

あとから来た女神「天上の国には何も変わったことはないか」

神駕の女神「天の主の神の一人娘が病気をしてもどんな事をしてしても効きめがないので困っている。えらい神々が集まって加持祈祷をしても験が無く、もう死ぬばかりになっている。それで神々の遊びを看守するものがなくなったゆえ、私が代って見張りに降りたのだ。地上の国には何も変わったことがないか」

あとから来た女神「地上にもたいへんな事がある。オキクルミが病気をして物も食わず、今はもう少しで死ぬばかりになっている」

その内に神々の遊びも終わってみな四方へ去ってしまい、見張りの女神も天上へ去る。オキクルミいそいでそのあとを追う。しばらくしてその女神を見失ったが、ついに天上の国へ出た。大きな郷があり、郷の中央に宗家の大家がある。静かにはいって左座を通して向こう座の一等奥の端へ坐ったが、光の雲が家の中を立ちこめてよく物が見えない。光の雲を払ってよく見ると、炉の向こうの正座には見るも尊げな老翁が、老嫗と並んで相ともに光をその身から発している。老翁は今しもはいって来るオキクルミを黙って見ていたが、声を荒げて言うには、「汝のはいって来るのを見て今はじめて合点が行った。私の娘は、汝を恋煩って寝ているのだったのだ。それとは知らず、神々を集めていろいろ祈祷していた。今汝を見てはじめて恋煩いと知った。しかし、汝らは、私の試みをやり遂げ兼ねたら、相添わすことはならないのだ。その試みとは、まず二人の詞曲人に詞曲を演じさせ、次に六人の神曲人に神曲を演じさせ、最後に六人の恋歌人に恋歌を歌わせる。その時汝らは決して笑ってはいけない。若し笑ったら添わすことはならないのだ」それからその通りやったが、最後の恋歌人が恋歌をやりながら或は倒れ或は起きてうつけたまねをする時、女神の方が少し笑ったので、老翁は声を荒らげ、「女の方が笑ったから、いま一つの試みを課してやる。オキクルミの方は男子の製作物、臼・杵・箕・鞆・機あらゆるものを一日に作りあげるのだ。娘の方は女子の製作物、着物や被り物や、首飾

りや、いっさいの縫い物を一日の内に仕上げるのだ云々」そこでオキクルミは花嫁と一緒に一日で見事に作り上げたら、老翁はさらに、「それを持って人間世界へ下り、男子の細工物はすっかり男子へ授け、女子の細工物はすっかり女子へ授け、詞曲も神曲も恋歌もすべて人間界へすっかり授けて来い。そしたらはじめて二人が相婚いでよろしい」

オキクルミはいっさい言われる通りにやってついに天神のこの一人娘と婚した。そして人間界の今日のありとある風習から、詞曲や神曲や恋歌に至るまで、こうしてオキクルミが天国からこの土へ移して始まったものであるというのである。

金田一京助 1926 「求婚伝説より羽衣・三輪山伝説へ - 説話に映じたアイヌ土俗の一面 - 」『民族』
一ノ二・三
(『金田一博士喜寿記念 アイヌ文化志 金田一京助選集Ⅱ』 pp. 455-486 に再録)

幌尻岳には実に様々なアイヌ伝承が残されている。しかし、近年はこのようなアイヌ伝承を語ることができる人は急激に減少し、アイヌ文化の風化も懸念される。このことから、幌尻岳は単に登山を楽しむだけの存在ではなく、アイヌの貴重な伝承が根付く地として知ってもらうためにも、名勝として指定されることを期待する。

引用・参考文献

- 金田一京助 1923 『アイヌ聖典』 改造社
金田一京助 1926 『金田一京助選集』 三省堂
更科源蔵 1955 『北海道伝説集・アイヌ編』 楡書房
吉田巖 1957 『日高國沙流アイヌ古老談話記録』
新冠町 1966 『新冠町史』 新冠町
北海道新聞社 1981 『北海道大百科事典 下巻』 北海道新聞社
山田秀三 1984 『北海道の地名』 北海道新聞社
早稲田大学語学研究所編 1985 『アイヌ語音声資料2』 早稲田大学語学研究所
早稲田大学語学研究所編 1986 『アイヌ語音声資料3 サダモ 私たちの起源』
早稲田大学語学研究所
川上まつ子(語り)、中村斎(文) 1986 『ポロシルンカムイになった少年』
(財)アイヌ民俗博物館
北海道教育庁生涯学習部文化課編 1988 『昭和62年度アイヌ民族文化財調査報告書』
北海道教育委員会
高橋誼 1990 『幌尻岳の高山植物』 平取町
新冠町 1995 『続新冠町史』 新冠町
萱野茂 1996 『萱野茂のアイヌ語事典』 三省堂
北海道教育庁生涯学習部文化課編 1996 『平成7年度アイヌ民族文化財調査報告書』
北海道教育委員会
北海道教育庁生涯学習部文化課編 1997 『平成8年度アイヌ民族文化財調査報告書』
北海道教育委員会
北海道教育庁生涯学習部文化課編 1998 『平成9年度アイヌ民族文化財調査報告書』
北海道教育委員会
アイヌ文化環境保全調査委員会、アイヌ文化環境保全調査室、平取町教育委員会文化課編
2006 『アイヌ文化環境保全対策調査総括報告書』 平取町

名勝ピリカノカについて

◎名勝ピリカノカとは何か（目的）

- ・北海道には、アイヌ民族の歴史、物語、伝承といった文化的背景と結びついた自然環境が多々あります。**中でも、名所や学術的に価値の高いものを、国指定の文化財「アイヌ文化に関連する名勝：ピリカノカ(アイヌ語で美しい形)」として指定し、保存・保護してアイヌ文化と北海道の大自然について理解を図ることを目的としています。**

◎北海道の名勝ピリカノカ指定の経過

- ・平成 18 年度、文化庁の要請により、北海道教育委員会は、市町村教委、アイヌ協会、アイヌ民俗研究センター、アイヌ研究推進機構の協力を得ながら、アイヌ文化に係る史跡候補地をリストアップしました。この時点で 172 箇所候補地が集まり、その後、文化庁主任調査官がアイヌ協会との打合せを行い、**21 箇所に候補地を絞込みました。**

この 21 箇所の候補地のうち、幌尻岳が含まれました。

現地調査、資料収集、土地所有者の確認など、**準備が整ったところから指定のための申請を行い、文化財保護審議会で答申後、文化庁の官報告示にて正式に名勝ピリカノカの指定となります。**

平成 21 年度から 24 年度までの指定地は以下のとおりとなります。

九度山（クトゥンヌプリ）	名寄市
黄金山（ピンネタイオルシペ）	石狩市
神威岬（カムイエトウ）	枝幸町、浜頓別町
襟裳岬（オンネエンルム）	えりも町
瞰望岩（インカルシ）	遠軽町
カムイチャシ	豊浦町
絵鞆半島外海岸	室蘭市
十勝幌尻岳（ポロシリ）	帯広市、中札内村

◎幌尻岳が名勝ピリカノカに選定された理由

- ・日高山脈の主峰幌尻岳は、標高 2053m ある山脈の最高峰となります。この山には、氷河時代に形成された圏谷（けんこく、またの名をカール）があります。このカールは、雨が降ると沼のようになり、この沼が 7 つあることから、地域の人達は古くから「**七つ沼カール**」と親しみをこめて呼んでいます。**数々の動植物が生息し、北海道の大自然を物語る豊かな自然を誇っています。そのため、「日本百名山」にも選ばれており、平取町側と新冠町側両方から登山を楽しむことができます。**

アイヌの人達の間では、**幌尻岳を舞台にした様々な伝説**があります。古来から神様がいる山として崇拝し、祈りを捧げていたといえます。アイヌ語で、「ポロ・シリ（大きな・山）」と呼ばれ、日高路での霊山とされている。

以上のことから、**豊かな自然を有し、アイヌ文化や伝説が息づくところとして、名勝ピリカノカに選定されました。（平成 25 年 10 月 17 日）**

***北海道で 9 箇所目、日高管内で 2 箇所目）**

***平成 26 年度は「平取町のオキクルミのチャシ及びムイノカ」が指定される。**